「世界の中にありながら世界に属さない」をめぐって

堀渕 伸治

亡くなる直前の写真（2013年４月）@ Mark Kushimi

吉福伸逸について語るのはとてもむずかしい。もちろん、ぼく自身と彼との関係性の問題というのもあるが、それは大きい要素ではない。吉福にはある種独特の他者との関係の作り方があり、彼に対面する人は、それが常に自分にとっての特別な体験へと収斂していくようなところがあるのだ。

彼はよく人の話しを聞く。そのうえで語られる言葉には、自分だけに向けて語られているのだと思わせる奇妙な説得力がある。だからこそ、彼の話をするひとは誰でも、とてもパーソナルな想いを語ることになる。

彼の死後、ネット上にはそういう言葉が溢れていた。そこで語られているのは吉福伸逸ではなく、語っている当の本人の独白に過ぎない。そういう語りにはまったく興味が持てない。むしろ、彼が何を考え、何を語り、何を語らなかったのかこそがあきらかにされなければならない。

本書は、2010年４月に、４日間にわたって開催されたレクチャーの記録である。それも吉福自身が自らの考えをまとめたいという希望から企画されたものだ。これまでたくさんの翻訳書や対談集を出してはいたものの、彼がどういう考えを人や社会やこの世界に対して持っているのかを、まとまった形で語ったものはほとんどなかったのだ。それは、10代の頃から彼を身近で見てきたぼく自身が望んだことでもあった。

吉福はトランスパーソナル心理学を日本に紹介したことで広く社会に認知されている。

トランスパーソナル心理学は、その名の通り、「個を超える」成長について語る心理学の一派である。この本でも言及されているが、60年代にアメリカを中心に始まった意識革命ともいうべきさまざまな経験が、それまでの心理学ではとらえきれない意識の領域についての探究を促し、トランスパーソナル心理学として結実したのである。吉福らの精力的な活動もあり、80年代には日本においても広く受け入れられた。

晩年の吉福は、そのトランスパーソナルが語る成長論が、楽観的で現実にそぐわないことにとても批判的であった。

―― 実際にいろいろな人と出会ってセラピーをやってみても、人はなかなか成長しない。人間の成長というのは大きな幻想だとぼくは実感してきたんですね。〈中略〉ぼくが多くの人を見て思ったのは、子どもの頃から成長していき、ある程度のところまでくるとそこで成長は止まってしまい、その先には行かなくなる。それからあともほぼ変化を起こすことはない。〈中略〉だからぼくは、多くの人の人生は、現状の自分を保つことに腐心するだけなのだと理解したんです。（p116）

「人間の成長というのは大きな幻想」であるという考えは、この本にかぎらず、吉福の基本的な認識である。

吉福は人を動かしてゆく最も根底的なものは「不安」だという。「もし不安が皆無の状態なら、生きていくという原動力を失う」とまで言いきっている。不安はなくすべきものでもないし悪いものでもない。が、その不安が、自我の自己保存本能を歪める形でさまざまな問題を引き起こす。われわれをこの現状に引き止めてしまうのも「不安」である。

その不安に打ち勝つにはどうすればいいのか。どこにわれわれの道があるのか。

―― ぼくのセラピーでは常に破綻することを勧めてきました。その人が今置かれている状況の中で破綻すれば、成長とは呼べないまでも変化があるからです。〈中略〉「大丈夫、破綻しなさいよ。破綻してしまえば、必ず何かが浮上してきますから、恐れずに破綻に向かってどんどん進みなさい」といつも言ってきました。（p117）

ともかく「変化」に向けて自我を破綻させること。これがこの本のもっとも基本的なメッセージである。が、しかしどうやって？ 言うのは簡単だが、それこそがもっとも困難なことではないのか。

それについての具体的な回答はない。「存在の力」をつけるとか「愚かであれ」とか、そこらあたりの自己啓発本と変わらない抽象的なことは語られているが、明確な答えがあるわけではない。ただ、自分について語ったところにヒントがある。

―― 一つだけ明確に言えるのは、自分の存在意義のようなものを模索しているとはぼくは思っていないんです。特に名前を残したいとか、そういったことも本当にないんですよ。ぼくにとって、それはどうでもいいんです。ぼくはこういう命を持っていて、これを生き切るっていうことが大切なんですね。生き切って、できるだけあらゆる瞬間に何らかの充実感を感じていたいと思っているんです。（p146）

この本は魅力的なことばで溢れている。人を揺り動かす基本的な枠組みとして語られる「四つの力」に始まり、吉福的成長論である「マトリクス論」、秀逸な「自我論」、われわれが作り上げる自己イメージの物語としての「英雄の道」や「メロドラマ」、社会を作り上げる「アクティングアウト」、そして「破綻のすすめ」。

ただ、そのどれもがこのなかで十分に語り尽くされているわけではない。どれもこれも、ある種、箇条書きのようにして投げ出されているのだ。読者の問題意識がそのまま本書の理解を形づくっていく、そういう書物としてこの本はある。行間を埋めるのは私たちにゆだねられている。

「世界の中にありながら世界に属さない」
吉福伸逸（サンガ、2015年）￥1800＋税